海底ケーブルの歴史と長崎

本会幹事　吉野誠次

１．国内電信の始まり

明治政府は、当初より電信事業の導入に前向きであった。明治2年(1869)東京と横浜間に電信線を敷設し、国内電報が開始された。

明治3年(1870)にはデンマーク政府特使の J･シッキが来日し、寺島宗則外務大輔と、日本への国際海底ケーブルの陸揚げに関する予備交渉を行った。

国際海底ケーブル敷設に関しては、技術も資金も無かった明治政府は、北欧からシベリアを経て極東までの長距離電信網を持つ大北電信会社と海底ケーブルの陸揚げ交渉を行った。

この時の日本側代表は、澤宣嘉外務卿（前初代長崎府知事）と寺島宗則であった。

大北電信会社側は、当初、横浜・大坂・長崎の三ケ所への陸揚げを希望したが、交渉の結果、明治3年(1870)8月に長崎と上海間、長崎とウラジオストック間の敷設で合意した。

２．大北電信会社について

大北電信会社は、1869年（明治2）6月にデンマーク国コペンハーゲンで国際通信社を目指して創業された。

国際海底電線小ヶ倉陸揚庫
（長崎市小ヶ倉町）

上記の合意に基づき、明治3年(1870)10月までに長崎港の地形を実測した結果、港口はケーブルを敷設するには不適と分った。周辺を調査し、明治4年(1871)2月に小ヶ倉千本にケーブル陸揚庫を建設した。

小ヶ倉に陸揚げされた電信線は、道路沿いに建てられた65本の電信柱で繋がれ、大北電信長崎支店が開設されていた、外国人居留地内にある長崎下り松のベルビューホテルの一室に引き込まれた。

これにより長崎と上海間は、明治4年6月に、長崎とウラジオストック間は、同年11月に通信を開始した。

明治4年長崎支店で業務を開始した当時の職員はデンマーク人4名であった。

明治13年(1880)初めて日本人職員が採用され、以降数多くの日本人が従事した。

３．国際電信の運営

長崎に届いた国際電信は、明治6年(1873)4月までは、飛脚等で横浜まで運んだので、7～9日間を要した。

そこで明治政府は、国際電信に対応して横浜と長崎間の電信事業を日本側で早急に開始することを決定し、電信線の架設に着工した。

旧ベルビューホテルの敷地にある石碑
（長崎市南山手町）

工事は、関門海峡の海底ケーブル敷設等多くの難工事であったが、明治6年2月に完成、同年4月に長崎電信局を開設して横浜までの通信を開始した。

その後、明治11年(1878)東京木挽町に電信中央局を開設して、日本側で国際電信も取り扱うこととした。

明治政府は、長崎と釜山間のケーブル敷設と引換えに、明治15年(1882)大北電信会社に日本とアジア間の国際通信独占権を与えた。以後、大北電信会社は、昭和18年(1943)の海底線の業務廃止まで日本の国際通信の独占を続けた。

国際通信が始まったことにより、大北電信会社が日本に様々な情報を伝え、例えば対外貿易の振興、日本の通信業の発達に寄与した功績は大きいものがある。

海底ケーブルで遅れをとった日本は、無線による電信の開発を熱心に進め、日露戦争ではその威力を発揮した。日本海海戦で、仮装巡洋艦「信濃丸」から旗艦「三笠」に「敵艦見ゆ」の第一報が届いたことが日本を勝利に導いたといわれている。

本稿は令和5年5月例会の発表要旨である。

参考文献

大野哲弥『国際通信史でみる明治日本』成文社 2012 年
石井寛司『情報・通信の社会史』有斐閣 1994 年